

ルルド。モンセラート巡礼の旅を終えて。

帰りの飛行機内食でいただいたクラッカーをほおぼりながら今、巡礼を振り返っています。「あれは夢だったのかしら？」と自分に問いかけたいくらい、日常と違う別世界を漂っていたような一週間でした。霊的な世界に半分足を踏み入れた感じというのでしょうか？普段教会で会っている信徒さん方々、新しく知り合って過ごしたほかの教会の方々、三人の神父様、松村さんはもちろんのこと現地で私たちを支えて下さったスタッフ、シスター、カタルーニャのヤマス神父様のご親戚の方々、その時すれ違った物売りのアフリカ系の目から輝きが消えている若者たち。そして私たちをそこここで出迎えてくれた大地、空、花や小鳥たち。巡礼に行くまでは、今回 MARIA 様に捧げるヴァイオリンを持っていくことの手続きに心を騒がせ、行ってる時も役目を果たさなければ～、などと思いつつおりましたが、終わってみれば心に残るものは人を通して、自然を通しての神との交わりに尽きました。

目の前の人を大切にし思いやり、寄り添うひと、ひと、ひと、またひと。

巡礼を通してそおと心をかけてくださった普段教会でさほど交流のなかった方々、また会ったばかりの他の教会の方々。ルルド修道院でのお食事時、私たちは量が多すぎて簡単に残してしまうにもかかわらず、いつも微笑みながら、あるいは話しかけながら、また無愛想ながら(心は込めてくれてるのがなぜか伝わってくる)食事の接待をして下さるシスターや女性スタッフ。巡礼スタッフとしてのガイドに徹してながら、「毎日物乞いをする術しかない人も私たちも同じ神の子～」と付きまとう物乞いのおじさんに対してたとえお金をあげることが出来ないとしても、まなざしを間違えてはいけないことをはっきり示して下さった方。また、時間が経つのも忘れロザリオの玄義の大切さをルルド教会内の十字架の道行きのモザイク画を見ながら熱く説明してくれたり、バス移動でどんなにみんなが疲れていても「できる人たちはどうぞ参加してください～」とロザリオの祈りをみんなで唱える機会を作ってください「いつも私のことではなく、隣の人を大切にしましょう～」と言われ身をもって示して下さった神父様。まだまだいくらでも書けそうです。

人とのかかわりは時として痛みさえ伴いますが、イエス様が最大の痛みを伴う形で私たちを愛して下さり、愛することの素晴らしさを見せてくださっていますから、私も願わくは小さな自分の十字架を担えるようになりたいです。

みんなで祈った時にバスの中から見えた真っ青の空に天使の翼が羽ばたいてるような勢いのある美しい雲。まさか日本でも見られるとは思いませんでしたが、今日(7/7)の雲はまさしくあの時見た雲が浮かんでいて、何としても今日こそ感想を出そうと促されました。

もうみんな日常に戻り、それぞれの置かれたところで生きていますが、あの時確かにマリア様から呼んで繋いでいただいた私たちだったと確信しています。

世界のいたるところに起こっている争い、自然の摂理として致し方なく起きる天災など、心痛むことも多いですが、罪びとながら日々許されて生きていることを感謝し、いつも平和がこの地に満ちるよう、ロザリオを通して祈れるものになっていきたいです。

感謝を込めて。

2017年7月7日 木村薫子